

「鯉淵学報」創刊 そして「鯉淵研報」へ

野口 貴彦^{1,*}

¹ 鯉淵学園農業栄養専門学校 食品栄養科

キーワード：鯉淵学報，鯉淵研報，鯉淵学園，鯉淵学園同窓会，教育研究報告編集委員会

I はじめに

鯉淵学園 教育研究報告 (ISSN 2187-6819) は、昭和 46 (1971) 年 9 月 1 日に「鯉淵学報」として創刊した後、本稿の執筆時点において第 34 号 (令和 5 年 3 月) までは発行されている。そして既に創刊から 53 年が経過しており、歴史ある学術誌であることに間違いはない。そこで本稿では、本誌が歩んできた歴史と発行に携わって来られた諸先輩方のご尽力について振り返りたいと思う。本来このような企画は、創刊 50 周年のタイミング (第 31 号) で取り組むべきことであったが、その重要な節目に編集委員長の任に就きながらそれが果たせなかったことは痛恨の極みである。本誌の創刊に尽力され第 34 号まで発行を積み重ねて来られた代々の編集委員長と編集委員の諸先輩方に心からお詫び申し上げる次第である。

本誌は、創刊 53 年の歴史があり当時の記録を示す際には、雑誌名、地名、著者や肩書についてその時代背景を尊重し、当時のまま記載させていただくこととした。

II 「鯉淵研報」のこれまでの歩み

本誌について、既刊の第 34 号までを振り返った時、大きく三つの期に区分することができると考えた。第一期は、「鯉淵学報」として発行された創刊号から第 11 号までである。続く第二期は、誌名を

「鯉淵学園 教育研究報告 (略称：鯉淵研報)」と改題した第 12 号から第 29 号 (休刊前) までである。そして第三期は、再発行を成し遂げた第 30 号からそれ以降である。ここでは、各号の編集担当者が当時の誌面に記した「まえがき」、「あとがき」、「編集後記」などを基に本誌のこれまでの歩みについて振り返ってみたい。

1. 第一期 (創刊号～第 11 号)

記念すべき創刊号 (図 1) は、昭和 46 (1971) 年 9 月 1 日に「鯉淵学報」として発行された。昭和 44 (1969) 年の同窓会常任委員会の席上において「同窓生が中心となって鯉淵学園でなければ出せないような内容の雑誌を作ろう」ということになり、昭和 45 (1970) 年に平山嘉夫氏、張替誠一郎氏を中心とした編集委員会が発足、誌名を「鯉淵学報」と決定、掲載内容は「農業指導、行政、研究の報告」として「優良事例・資料等で、農政と指導現場の触媒となるようなもの」とされた。当初は、昭和 45 (1970) 年 11 月に発行する計画であったが、論文執筆の問題、資金準備の問題などがあり、発行できたのは昭和 46 (1971) 年 9 月で、そこには『生まれ出ずる悩み』はすこぶる大きく、かつ長かった」と記されている。創刊号の発行に際しては、「編集委員の和田文雄氏、平山嘉夫氏のご尽力のたまものであった」とも記されていた。

続く第 2 号は、昭和 50 (1975) 年 9 月 1 日に発行され、創刊号の発行から 4 年後となっていた。編集後記によると、「当初計画では、季刊かそれが困難な場合でも年報としたいということであったが、諸般の事情により 4 年間が経過してしまった」、さらに「依然として前途多難な鯉淵学報である」と記

¹ 〒 319-0323 茨城県水戸市鯉淵町 5965

* 鯉淵研報 第九代編集委員長

目 次	
鯉淵学報の発刊にあたって	和田 文雄 1
鯉淵学報の発刊にあたって	秋 沢 清 三 2
発刊に寄せて	石 橋 幸 雄 3
日本農業四つの論点	満 永 正 昭 5
寄葉物配センターの意義と実態	川 野 修 正 12
総合実験農場の考察	中 村 恵 一 18
農林省「農業経営調査の足跡と経営構造改善調査」の開始	佐 藤 三 郎 27
後継者の経営参加と経営発展	久 保 良 雄 34
新しいみかん栽培技術	早 上 廣 夫 39
田舎農家の耕作技術	渡 辺 正 信 43
グループ・フルート余録	岡 千 里 49
松本どう園をたずねて	豊 崎 誠 一 郎 52
南農場の鳥獣害	砂 田 義 雄 56
今日の統計	今 田 忠 雄 64
編集後記	67

図 1. 鯉淵学報 創刊号

されていた。

第 3 号は、昭和 55 (1980) 年 9 月 1 日に発行され、前号の発行から 5 年後となっていた。「5 年間隔では、余りに間が空きすぎており次号はもう少し間をつめたい」と記されていた。また「総頁数 65 頁の予定が 88 頁となっており、予定した論文のいくつかを次回に譲らざるを得なくなった」こと、そして「卒業生の投稿を期待している」ことが記されていた。

第 4 号は、昭和 57 (1982) 年 7 月 10 日に発行され、前号の発行から 2 年後となっていた。これまで 4、5 年間隔で発行されていたが、第 4 号はかなり短縮され 2 年での発行となっていた。この第 4 号には、「本校の栄養士教育について」と題して、川井観二先生の論文（辞任のことば）が掲載されていた。

第 5 号は、昭和 58 (1983) 年 9 月 1 日に発行され、前号の発行から 1 年後となっていた。そしてこの第 5 号は、財団法人農民教育協会（現 公益財団法人鯉淵学園）初代会長 東畑精一先生の追悼号となっていた。

第 6 号は、昭和 63 (1988) 年 3 月に発行され、前号の発行から 5 年後となっていた。第 5 号の発行後、5 年が経過しており、今後は原則として年 1 回の発行を目指したいと記してあった。第 6 号では、初めて「まえがき」を「教務部教育普及係」が担当したことが記され、そして「鯉淵学報第 6 号に

寄せて」とした松本正雄学園長のお言葉が初めての「巻頭言」として掲載されていた。また、第 6 号より誌名の「淵」が「淵」に改められていたが、この理由については明確に記されていなかった。その当時の資料を探してみると、石橋幸雄先生が昭和 54 (1979) 年に出版された著書「鯉淵学園」では「淵」とされており、また「鯉淵学園五十年史」には、学則や諸規程など時期によって「淵」と「淵」の表記の違いが認められるが、「しかし、公式文書は淵を用いることになっている。すなわち淵は正字で、淵は俗字というわけである。」との記述があった。そして同窓会が平成 3 (1991) 年に出版した「鯉淵学園学生寮史」では「淵」とされていたことから、同窓会が中心となって執筆するような資料・出版物では、「淵」が好んで使用されていたのではと推測された（ただし「鯉淵学園二十年史」では、題字のみ「淵」が使われ、本文中は基本全て「淵」が使われているなどの例外もあった）。よって本誌は、同窓会が中心となり創刊されたことから「鯉淵学報」となったと考えても不思議ではない。そして第 6 号発行の頃から編集作業において同窓会のかかわりが弱まり、教職員が主体となっていったとの情報もあることから「鯉淵学報」と改められたと考えれば辻褄が合う（後述する本誌の編集体制が整理され始めた時期とも一致する）。

第 7 号は、平成元 (1989) 年 8 月に発行され、

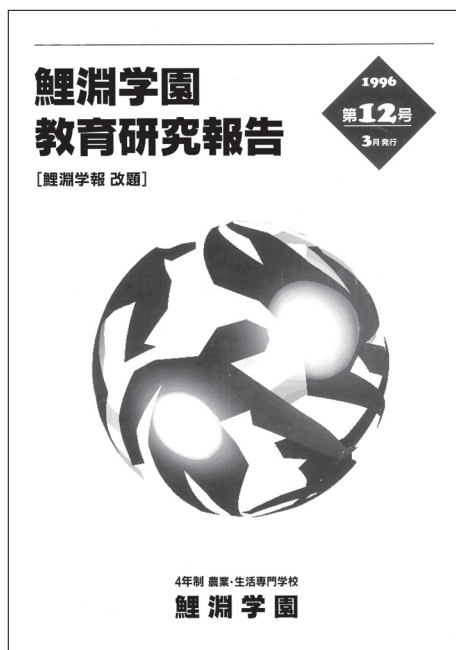
前号の発行から1年後となっていた。本号は、年号が「平成」と改まった最初の記念号となった。「まえがき」、「編集後記」とともに「教務部教育普及係」が担当し、巻頭言はなかった。これは松本学園長が、随想「感無量なこと」を投稿されていたためと推察される。

第8号は、平成2（1990）年12月に発行され、前号の発行から1年後となっていた。本号も「まえがき」、「編集後記」とともに「教務部教育普及係」が担当し、巻頭言はなかった。まだまだ雑誌の体裁が確立されておらず、試行錯誤が続いていることが分

かる。しかし、第6号を発行した後、第7、8号と毎年発行されており、編集委員及び編集事務局の努力が伝わってくる。

第9号は、平成4（1992）年3月に発行され、前号の発行から1年3ヶ月後となっていた。本号も「まえがき」、「編集後記」とともに「教務部教育普及係」が担当し、巻頭言はなかった。

第10号は、平成6（1994）年3月に発行され、前号の発行から2年後となっていた。本号も「まえがき」、「編集後記」とともに「教務部教育普及係」が担当し、巻頭言はなかった。また、前号の発行後2



鯉淵学園 教育研究報告 第12号	
目 次	
巻頭のことば	
「鯉淵学報」と「鯉淵学園 教育研究報告」と改題するにあたって	……学芸部長……穴戸 弘昭……1
「鯉淵学園 教育研究報告」が行われるにあたり	……同窓会長……飯丸 博昭……2
「鯉淵学園 教育研究報告」の発行に寄せて	……農林水産省普及教育課……佐沢 昭昭……3
I 研究報告編	
〈観 文〉	
微生物資材の添加が哺乳牛糞の堆肥化ならびに処理環境の 作物およびサイレージへ及ぼす影響（第1報）	……山本英治・藤村 透・砂田義雄……1
水素レソンの変色に関する研究	……岡井 光……9
水稲栽培における木酢液の効果 （第2報）水稲の生育と収量に及ぼす影響（1994年度試験）	……小田和雄……15
野菜栽培における木酢液の効果 （第3報）トマトの生育、収量、品質に及ぼす影響	……清井義昭……21
高品質・高収量のアイコン生産に関する研究 （第2報）1995年春季および秋播きアイコンの播種期とマルチフィルムの 使用が収量の発生とアイコンの品質・収量に及ぼす影響	……藤田 啓……25
〈ソート〉	
普及事業部群の発展の対症 ——農業普及の50年を顧みて——	……農業部長……31
鯉淵学園の50年 ——略年表と解説——	……清井義昭……38
私と鯉淵学園 ——4年制第1回入学生への講演記録——	……吉川昭昭……49

〈新技術開発報告〉	
乳製牛を特用したソフトヤシロソーモーターの製造技術の開発 （第2報）畜肉肉、スライス等の配合と食味との関係	……利山博茂・中野光志・佐藤利文……53
II 教育事業報告編	
学生の学習記録	
卒業論文（平成1年度）	……57
はじめに	……57
平成4年度本科卒業生の卒業論文要旨（代食刊）	……57
平成4年度本科卒業生の卒業論文テーマ一覧	……65
平成6年度普及専攻科卒業生の卒業論文テーマ一覧	……68
学外実習（農業研修・給食施設研修）レポート（平成1年度・代表例）	……70
はじめに	……70
秋田県大館市・久保良子さん宅での実習レポート	……農業科2年（園芸コース）鈴木 達……70
富山県黒部市・サカタ農産での実習レポート	……農業科2年（園芸コース）藤井文子……73
青森県大館市・田村より子さん宅での実習レポート	……農業科2年（園芸コース）藤井文子……76
青森県大館市・佐藤より子さん宅での実習レポート	……農業科2年（畜産コース）坂本真希……79
茨城県茨城県立五郷小学校での実習レポート	……生活栄養科3年 佐藤千里……80
平成7年度農業科2年生学外実習 受け入れ農家・機関一覧	……83
平成7年度生活栄養科3年給食管理実習 受け入れ機関一覧	……84
教職員の調査・研究活動の記録（平成1年度・研究要旨）	……85
学園日誌（平成1年度）	……87
教職員と主な担当授業科目（平成1年度）	……92
鯉淵学園概要（平成1年度）	……97
鯉淵学園 教育研究報告 編集後記	……103
鯉淵学園 教育研究報告 投稿後記	……103
鯉淵学園 教育研究報告 執筆要領	……104

図2. 鯉淵学園 教育研究報告 第12号

年を要していたが、「まえがき」に鯉淵学園は平成7年度から4年制の専門学校に衣替えするとの記述があるように、学園改革の業務に追われる中で並行して編集作業を行うことは困難を極めたことと推察される。

第11号は、平成7(1995)年3月に発行され、前号の発行から1年後となっていた。本号より「まえがき」を「事務部企画渉外係」が担当し、「編集後記」を「編集事務局」が担当していた。本号の「まえがき」に「鯉淵学報は、より内容を充実して新展開を図るために次号から体裁を一新する」と記されていた。創刊号から第11号まで、24年に及ぶ「鯉淵学報・第一期」の終焉をここに迎えることとなった。

第一期を一言で振り返ると、まさしく「生まれ出ずる悩み」であったと言える。当初は、季刊か年刊での発行を計画していたが、ほぼ年刊となったのは第7号発行まで約18年を要していた。またその間、編集組織の体制や誌面の体裁にも試行錯誤の跡が認められ、その当時編集作業に当たられた諸先輩方の苦悩を感じずにはいられなかった。しかしそれ以上に、本誌を充実させたい、発行を継続し歴史を築き上げたいという強い信念のもと編集作業に携わっていたことを感じることができ、これはまさに尊敬の一言に尽きる。第一期の編集に携わられた諸先輩方の強い思いがあったからこそ、本誌はその思いを受け継ぎ令和の時代まで発行を継続できたといっても過言ではない。

2. 第二期(第12号～第29号)

第12号(図2)は、「鯉淵学報」から「鯉淵学園教育研究報告」と改題され、平成8(1996)年3月31日に発行された。この年は、本校にとって創立50周年で4年制専門学校に改組した重要な時期であり、同時に本誌も大幅な刷新が行われた重要な転換点である。第12号の編集過程において、「鯉淵学園教育研究報告編集規程(平成7年4月1日施行)」、「鯉淵学園教育研究報告投稿規程」及び「鯉淵学園教育研究報告執筆要領」がそれぞれ施行され、それに合わせて編集委員会(委員長 土崎常男先生)が設置され、編集委員長が「編集人」として明確化された。また、巻頭言として「巻頭のことば」を宍戸弘明学園長が記され、「編集後記」を編集委員長が担当するという現在に至る誌面の基礎がこ

で出来上がっている。これら誌面の刷新・体系化は、土崎委員長を中心とした編集委員会により築き上げられており、各委員・幹事の新しい雑誌を作るという強い思いが感じられた。宍戸学園長の「巻頭のことば」には、これまでの「鯉淵学報」として「同窓生が中心となって鯉淵学園でなければ出せないような内容の雑誌」という意義に加え、鯉淵学園とその関係者が持つ優れた教育・研究の内容と成果をこれまで以上に積極的に外に広く広報することとし、①学園関係者のレベルの高い研究成果を公表すると共に解説・資料を充実させる、②学園における教育研究事業の正確な記録を残すこと、③学園の広報記事を充実させること、④編集規程などを整備することが付け加えられている。最後には、「鯉淵学園教育研究報告が学園関係者の内部だけではなく、外に開かれた学園からの情報発信の中核として、その役割を十分に果たせるよう今後の発展を心から期待しています。」と締めくくられていた。そして第12号からは「Ⅰ 教育研究報告編」に加え、本校におけるその年の教育活動を記録する「Ⅱ 教育事業報告編」が新設された。続く第13号は、平成9(1997)年3月31日に発行され、巻頭のことばを宍戸学園長が、編集後記を土崎編集委員長が記されており、この誌面スタイルがここで確立され継続していくこととなった。第14号は、平成10(1998)年3月31日に発行され、土崎編集委員長としての最終号となった。

第15号は、平成11(1999)年3月31日に発行され、編集委員長に中島紀一先生が就任され「鯉淵研報」の第2ステージに入った。その後、中島編集委員長の下、第16号(平成12年3月31日発行)、第17号(平成13年3月31日発行)が発行された。

第18号は、平成14(2002)年3月31日に発行され、編集委員長に笛木昭先生が就任されている。また平成13年度より鯉淵学園総合研究として「環境保全・循環型農業の実証研究」が充足しており、その研究目的や成果に関する報告などが掲載されていた。第19号は、平成15(2003)年3月31日に発行され、鯉淵学園総合研究の報告が研究報告編の約4割程度を占めるようになっていた。

第20号は、平成16(2004)年3月31日に発行され、編集委員長に山本昌弘先生が就任されている。そして平成15年度より始まった「若者新規就農促進教育研究(鯉淵学園総合研究)」についての報告

が初掲載されていた。その後、山本編集委員長の下、第21号（平成17年3月31日発行）、第22号（平成18年3月31日発行）、第23号（平成19年3月31日発行）、第24号（平成20年3月31日発行）が発行された。

第25号は、平成21（2009）年3月31日に発行され、編集委員長に小林秀行先生が就任されている。その後、小林編集委員長の下、第26号（平成22年3月31日発行）、第27号（平成23年3月31日発行）が発行された。小林先生は、生活栄養科学科（4年制・栄養士養成課程）の教員から初の編集委員長となられ、その職責を果たされた。

第28号は、平成24（2012）年3月31日に発行され、編集委員長に小川吉雄先生が就任されている。第29号は、平成25（2013）年3月31日に発行され、編集委員であった井上洋一先生のご尽力により、本誌として初めて「ISSN（International Standard Serial Number：国際標準逐次刊行物番号）」を取得すると共に国立国会図書館への納本が開始された。しかし、第30号の編集作業に入る段階で、編集委員会にて本誌の今後のあり方が検討され、ここ数号で投稿論文数が減少していることや学内の様々な問題を考慮した結果、近藤博彦学園長が休刊という苦渋の決断を下された。

第二期は、本誌の輝かしい発展と休刊という二面性を合わせ持つこととなった。前半は、誌名の改題に始まり、編集体制の体系化（鯉淵学園教育研究報告編集規程の施行など）と誌面の刷新が行われ、続けて鯉淵学園総合研究「環境保全・循環型農業の実証研究」・「若者新規就農促進教育研究」の論文が多く掲載されるなど、本誌の歴史において最もアカデミックで活発な期間であったと言える。しかし、後半になると本校入学生数の減少に伴い様々な問題が顕在化し始め、思い切った改革を進める中で本誌も休刊という苦渋の選択をせざるを得なくなったことが悔やまれる。

3. 第三期（第30号～）

平成が終わり令和の幕開けとともに就任された島崎弘幸学園長は、学校改革の柱として「農と食」教育・研究力の更なる向上と情報発信を推し進める方策を検討され始めた。その一つとして元編集委員長でもあった小林秀行先生らが「教育研究報告」の再発行を提案され、協議の結果、令和元年6月の教授

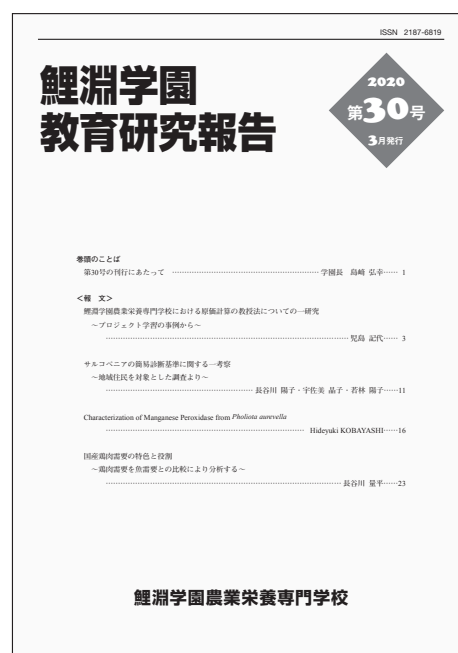


図3. 鯉淵学園 教育研究報告 第30号

会にて教育研究報告の再発行を目指す編集委員会の設置（編集委員長として筆者が就任）が承認され、様々な取り組みが始まった。新しい教育研究報告をどのようなものにしていくのか協議が進められた結果、調査・研究報告を中心に据えることが決まり、まずは「研究報告編」のみで再開することとなった。そして7年間の休刊期間を経て無事、第30号（図3）が令和2（2020）年3月31日に発行され、その後、第31号（令和3年3月31日発行）、第32号（令和4年3月31日発行）、第33号（令和5年3月31日発行）、第34号（令和6年3月31日発行）が発行された。

第三期は、既に5巻が発行されたが、まだまだ試行錯誤の段階であると言える。掲載する論文種はこれまでと同様、総説、報文（調査・研究報告、短報を含む）、解説、随想とした。そして休刊要因となった課題（掲載論文数の減少）を踏まえ、投稿のハードルを下げることを目的として積極的に「解説」を掲載することとし、さらに第31号からは投稿の間口を広げることを目的として論文種に「事例報告」を新設した。

Ⅲ 教育研究報告の編集体制

ここでは、本誌の編集体制が創刊号でどの様に立ち上がり、発行を重ねていく中でどのように変化し、

どのような先生方が編集委員・幹事として携わってこられたのか振り返ってみたい（表1）。

1. 第一期

創刊号の発行に向けては、昭和45（1970）年に平山嘉夫氏、張替誠一郎氏を中心に「編集委員会」が発足し、編集作業を始めたこと創刊号に記してあった。よって平山氏と張替氏を初代編集委員長と見ることができる。同時に「学報編集事務局（現幹事）」が立ち上がり、編集作業全般を担ったことが分かる。ただ当時の状況を示す現存資料は「鯉淵学報創刊号」のみであり、編集委員会及び学報編集事務局の当初メンバーの記録は残念ながら認められないなど当時の詳細を掴むことはできなかった。第2号から巻末に「発行所」と「発行責任者」の記載が始まっていた。発行所は「鯉淵学園」とされ、「発行

責任者」には西村典夫先生が記されていた。当時は、編集委員長長の立場の方が発行責任者とされていたと推察される。第3号では、発行責任者に編集委員長長の立場の方ではなく吉川直行学園長が記されており、第2号との一貫性が若干感じられなかった。さらに編集後記の担当が「学報編集事務局」ではなく築島宏先生の個人名が記されており、学報編集事務局局長（現編集委員会幹事長）の立場であったと推察される。そしてこの「編集委員会」と「学報編集事務局」体制による編集作業・発行が第5号まで続いたが、編集委員会と学報編集事務局のメンバーについての詳細は、残念ながら記されていなかった。

第6号ではこれまでと同様、発行責任者に松本正雄学園長が記されていた。そしてこの第6号より、編集体制が「編集委員」と「編集事務局（現幹事）」となったことが明記されており、ここから体制が整

表1. 鯉淵学園教育研究報告の発行と編集体制

号	雑誌名	発行年		編集委員長	教育事業 報告	備考
創刊号	鯉淵学報	昭和46(1971)年9月	初代	平山嘉夫、張替誠一郎	—	
第2号	鯉淵学報	昭和50(1975)年9月		西村典夫ら	有	
第3号	鯉淵学報	昭和55(1980)年9月		記載なし	—	
第4号	鯉淵学報	昭和57(1982)年7月		記載なし	—	
第5号	鯉淵学報	昭和58(1983)年9月		記載なし	—	
第6号	鯉淵学報	昭和63(1988)年3月	第二代	西村典夫ら	—	
第7号	鯉淵学報	平成元(1989)年8月		西村典夫ら	—	
第8号	鯉淵学報	平成2(1990)年12月		西村典夫ら	—	
第9号	鯉淵学報	平成4(1992)年3月		西村典夫ら	—	
第10号	鯉淵学報	平成6(1994)年3月		記載なし	—	
第11号	鯉淵学報	平成7(1995)年3月		土崎常男ら	—	
第12号	鯉淵学園教育研究報告	平成8(1996)年3月	第三代	土崎常男	有	略称を「鯉淵研報」とする。
第13号	鯉淵学園教育研究報告	平成9(1997)年3月		土崎常男	有	
第14号	鯉淵学園教育研究報告	平成10(1998)年3月		土崎常男	有	
第15号	鯉淵学園教育研究報告	平成11(1999)年3月	第四代	中島紀一	有	
第16号	鯉淵学園教育研究報告	平成12(2000)年3月		中島紀一	有	
第17号	鯉淵学園教育研究報告	平成13(2001)年3月		中島紀一	有	
第18号	鯉淵学園教育研究報告	平成14(2002)年3月	第五代	笛木昭	有	
第19号	鯉淵学園教育研究報告	平成15(2003)年3月		笛木昭	有	
第20号	鯉淵学園教育研究報告	平成16(2004)年3月	第六代	山本昌弘	有	
第21号	鯉淵学園教育研究報告	平成17(2005)年3月		山本昌弘	有	
第22号	鯉淵学園教育研究報告	平成18(2006)年3月		山本昌弘	有	
第23号	鯉淵学園教育研究報告	平成19(2007)年3月		山本昌弘	有	
第24号	鯉淵学園教育研究報告	平成20(2008)年3月		山本昌弘	有	
第25号	鯉淵学園教育研究報告	平成21(2009)年3月	第七代	小林秀行	有	
第26号	鯉淵学園教育研究報告	平成22(2010)年3月		小林秀行	有	
第27号	鯉淵学園教育研究報告	平成23(2011)年3月		小林秀行	有	
第28号	鯉淵学園教育研究報告	平成24(2012)年3月	第八代	小川吉雄	有	
第29号	鯉淵学園教育研究報告	平成25(2013)年3月		小川吉雄	有	「ISSN」を取得。休刊。 再刊。公式HPでの公開を開始。 創刊50周年。
第30号	鯉淵学園教育研究報告	令和2(2020)年3月	第九代	野口貴彦	—	
第31号	鯉淵学園教育研究報告	令和3(2021)年3月		野口貴彦	—	
第32号	鯉淵学園教育研究報告	令和4(2022)年3月		野口貴彦	—	
第33号	鯉淵学園教育研究報告	令和5(2023)年3月		野口貴彦	—	
第34号	鯉淵学園教育研究報告	令和6(2024)年3月		野口貴彦	—	

い始めたことが伺える。その編集委員には、西村典夫先生、砂田義雄先生、飯塚節夫先生、丸川慎三先生、川井光先生の名が連ねられ、編集事務局には、関正治先生、涌井義郎先生の名が連ねられていた。この時期においても、これまで同様、編集委員長との表記はなく、編集委員において編集作業が進められ、編集事務局が印刷所などとのやり取りを行っていたと推察される。そのような事情もあり編集委員筆頭に西村先生の記載があることから第二代編集委員長として活動されたとして問題はないと考えた。また、「編集後記」担当として「教務部教育普及係」が記されており、学園組織である教務部教育普及係と編集委員・編集事務局の一部教職員が兼務する形をとっていたと推察された。そしてこの編集体制は、第9号まで続いたがその間、編集委員及び編集事務局のメンバーは、毎号、若干の入れ替えが行われていた。

第10号では、発行責任者に宍戸学園長の名が記されていたが、編集委員及び編集事務局メンバーの記載はなかった。「まえがき」を教務部教育普及係が担当し、「編集後記」を編集事務局が担当したことだけが記されていた。これはこれまでの表記と異なっていたが編集体制が第9号までと変更されたかまでは判断できなかった。ただし、これまで同様、教務部教育普及係と編集事務局が連携して発行したことは間違いない。

第11号では、発行責任者に宍戸学園長の名が記されていた。そして編集委員には、土崎常男先生、川井光先生、中野光志先生、飯塚節夫先生の名前が連ねられていたが、編集事務局メンバーの記載は認められなかった。しかし「まえがき」を「事務部企画渉外係」が担当し、「編集後記」を「編集事務局」が担当していることから、前号までと同様に編集事務局と事務部企画渉外係（旧教育普及係）が連携して編集作業に携わっていたことが推察された。

この第一期は、ここで示したように編集体制についても試行錯誤が繰り返されていたことが分かる。その様な中でも編集作業に携われた編集委員会、編集委員、学報編集事務局、編集事務局、教務部教育普及係、事務部企画渉外係の先生方の本誌発行に対する情熱を感じることができた。そして第11号編集委員の土崎先生は、この後に第三代編集委員長として編集体制を一新し、体裁を新たに第12号の発行を目指して編集作業に臨まれることとなる。

2. 第二期

鯉淵学園が平成7年より4年制の農業・生活専門学校となるに当たり、これまでの「鯉淵学報」を「鯉淵学園教育研究報告（鯉淵研報）」と改題することとなった。そのため平成6年12月の教授会で「鯉淵研報」の編集規程が制定され、その規程に基づき平成7年6月の教授会で編集委員会の設置が承認され、ここで初めて「編集委員長」という立場が明確化されると共に土崎常男先生が就任された（第三代編集委員長）。編集委員会には、委員に安藤義道先生、川井光先生、中野光志先生、編集幹事に中島紀一先生、入江三弥子先生の名が連ねられていた。ここで確立された編集（編集委員・幹事）体制は、その後、現在に至る第35号まで続いていくこととなる。土崎編集委員長の下で発行された第12～14号の編集委員会には、委員に安藤義道先生、川井光先生、中野光志先生、編集幹事に中島紀一先生、入江三弥子先生、中島智先生の名が連ねられていた。

第四代編集委員長に中島紀一先生が就任し、第15～17号を発行された。その編集委員には、土崎常男先生、中野光志先生、川井光先生、山下達雄先生、相井孝允先生、編集幹事に山本昌弘先生、中島智先生の名が連ねられていた。

第五代編集委員長に笛木昭先生が就任し、第18～19号を発行された。その編集委員には、山下達雄先生、相井孝允先生、川井光先生、編集幹事に山本昌弘先生、中島智先生の名が連ねられていた。

第六代編集委員長に山本昌弘先生が就任し、第20～24号を発行された。その編集委員には、山下達雄先生、相井孝允先生、入江三弥子先生、藤澤一朗先生、廣木政昭先生、編集幹事に中島智先生、筆者の名が連ねられていた。

第七代編集委員長に小林秀行先生が就任し、第25～27号を発行された。その編集委員には、山本昌弘先生、假屋善弘先生、入江三弥子先生、編集幹事に中島智先生、筆者の名が連ねられていた。

第八代編集委員長に小川吉雄先生が就任し第28、29号を発行された。その編集委員には、假屋善弘先生、入江三弥子先生、編集幹事に井上洋一先生、山口朋美先生の名が連ねられていた。

3. 第三期

第九代編集委員長には筆者が就任することとなった。第三期の編集体制は、土崎委員長が築き上げ

られたものを踏襲する形とし、「鯉淵学園教育研究報告編集規程」などもそのまま遵用することとした。そして第 30 号の編集委員会は、編集委員に前嶋（中島）智先生、浅津竜子先生、幹事に平澤（山口）朋美先生が就任され、再発行に向けて編集作業に臨んだ。これまで編集委員会の幹事しか経験したことがなかった筆者が委員長となり、休刊後の再発行という重責を担えるか不安ではあったが、編集委員・幹事の協力もあり無事に第 30 号を発行できたことには感謝の言葉しかない。その後、毎年順調に第 31～34 号を発行することができ今に至っている。その編集委員には、前嶋智先生、浅津竜子先生、高田良三先生、幹事に平澤朋美先生、長谷川陽子先

生、勝山由美先生の名が連ねられていた。

Ⅳ おわりに

本誌は、「鯉淵学報」として創刊後 53 年が経過し、第 34 号まで発行されている（執筆現在、第 35 号の編集作業中）。これまで編集委員長には 9 名が就任され（表 1）、編集委員・幹事には記録が残っている先生方のみでも 26 名が就任されていた（編集委員として活動されたのち編集委員長に就任された方を含む）。既刊の全 34 号を読み返したところ、これら約 30 名の先生方の本校での教育・研究力の向上と情報発信の重要な媒体として、本誌の発展と

表 2. 鯉淵学報と鯉淵研報に掲載された論文

期	号	掲載論文数	分野別論文数		
			農業・バイオ	食品・栄養	その他
第一期	創刊号	11	10	1	
	第 2 号	8	7		1
	第 3 号	7	6		1
	第 4 号	5	1	1	3
	第 5 号	6	4		2
	第 6 号	5	3	1	1
	第 7 号	7	6		1
	第 8 号	6	4		2
	第 9 号	7	4	1	2
	第 10 号	5	2	2	1
	第 11 号	6 (73)	4	2	
第二期	第 12 号	9	5	2	2
	第 13 号	8	6	1	1
	第 14 号	8	6	1	1
	第 15 号	8	8		
	第 16 号	6	6		
	第 17 号	4	3		1
	第 18 号	11	7	2	2
	第 19 号	8	5	1	2
	第 20 号	11	9	1	1
	第 21 号	13	9	2	2
	第 22 号	10	5	2	3
	第 23 号	6	3	2	1
	第 24 号	10	7	1	2
	第 25 号	4	2	2	
	第 26 号	4	2	1	1
	第 27 号	2		1	1
	第 28 号	7	5	2	
	第 29 号	7 (136)	3	1	3
第三期	第 30 号	4	3	1	
	第 31 号	5	1	3	1
	第 32 号	7	2	4	1
	第 33 号	6	2	4	
	第 34 号	6 (28)	1	5	
合計		237	151	47	39

* () 内の数字は、各期ごとの論文数の合計を示す。

継続にかかる強い思いを感じることができた。また掲載された論文総数は237報であり、分野別にみると農業・バイオ系が151報、食品・栄養系が47報、その他が39報となっていた（表2）。これまでは農業・バイオ系論文の掲載が圧倒的に多くを占めており、我が国の農業の調査・研究、発展に少なからず貢献できたものとする。論文数を期別にみると、第一期（全11号）が73報（6.6報/号）、第二期（全18号）が136報（7.6報/号）、第三期（全5号）が28報（5.6報/号）となっており（表2）、ここでも第二期の充実ぶりが目立っている。ただし第三期は、まだ始まったばかりでありこれからさらに掲載論文数を増やし、更なる誌面の充実を期待している。本稿の執筆当初の予定では、これまで本誌に掲載された論文を分析することで我が国の農業・食物栄養分野がどの様に発展してきたのか、本誌がその発展にどのような学術的貢献を果たしたのかなどについて評価するつもりであったが、残念ながら頁の都合上割愛することとした。次の機会があればまとめ直し投稿したいと思う。

最後に本誌はこれからも発行を続け、本校の教育・研究の更なる向上と情報発信に貢献し続けながら記念号となる第50号の発行とその次に来る創刊100周年を目指して欲しいと心から願っている。その機会が訪れた暁には、可能であれば筆者も編集委員長経験者の一人としてお祝いの意味を込めて寄稿したいと思う。その機会が訪れることを編集委員として重責を担うであろう次世代の先生方に期待したい。

V 参考文献

- 1) 鯉淵学報 創刊号 (1971), 平山嘉夫・張替誠一郎 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 2) 鯉淵学報 第2号 (1975), 西村典夫 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 3) 鯉淵学報 第3号 (1980), 編集委員会 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 4) 鯉淵学報 第4号 (1982), 編集委員会 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 5) 鯉淵学報 第5号 (1983), 編集委員会 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 6) 鯉淵学報 第6号 (1988), 西村典夫ら (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 7) 鯉淵学報 第7号 (1989), 西村典夫ら (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 8) 鯉淵学報 第8号 (1990), 西村典夫ら (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 9) 鯉淵学報 第9号 (1992), 西村典夫ら (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 10) 鯉淵学報 第10号 (1994), 編集委員会 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 11) 鯉淵学報 第11号 (1995), 土崎常男ら (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 12) 鯉淵学園 教育研究報告 第12号 (1996), 土崎常男 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 13) 鯉淵学園 教育研究報告 第13号 (1997), 土崎常男 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 14) 鯉淵学園 教育研究報告 第14号 (1998), 土崎常男 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 15) 鯉淵学園 教育研究報告 第15号 (1999), 中島紀一 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 16) 鯉淵学園 教育研究報告 第16号 (2000), 中島紀一 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 17) 鯉淵学園 教育研究報告 第17号 (2001), 中島紀一 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 18) 鯉淵学園 教育研究報告 第18号 (2002), 笛木昭 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 19) 鯉淵学園 教育研究報告 第19号 (2003), 笛木昭 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 20) 鯉淵学園 教育研究報告 第20号 (2004), 山本昌弘 (編集), 鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 21) 鯉淵学園 教育研究報告 第21号 (2005), 山本昌弘 (編集), 鯉淵学園, 茨城県水戸市。
- 22) 鯉淵学園 教育研究報告 第22号 (2006), 山本昌弘 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 23) 鯉淵学園 教育研究報告 第23号 (2007), 山本昌弘 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 24) 鯉淵学園 教育研究報告 第24号 (2008), 山本昌弘 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 25) 鯉淵学園 教育研究報告 第25号 (2009), 小林秀行 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 26) 鯉淵学園 教育研究報告 第26号 (2010), 小林秀行 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 27) 鯉淵学園 教育研究報告 第27号 (2011), 小林秀行 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 28) 鯉淵学園 教育研究報告 第28号 (2012), 小川吉雄 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 29) 鯉淵学園 教育研究報告 第29号 (2013), 小川吉雄 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 30) 鯉淵学園 教育研究報告 第30号 (2020), 野口貴彦 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 31) 鯉淵学園 教育研究報告 第31号 (2021), 野口貴彦 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 32) 鯉淵学園 教育研究報告 第32号 (2022), 野口貴彦 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 33) 鯉淵学園 教育研究報告 第33号 (2023), 野口貴彦 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 34) 鯉淵学園 教育研究報告 第34号 (2024), 野口貴彦 (編集), 鯉淵学園農業栄養専門学校, 茨城県水戸市。
- 35) 石橋幸雄 (1979), 鯉淵学園, 崙書房, 茨城県土浦市。
- 36) 鯉淵学園二十年史編集委員会 (1967), 鯉淵学園二十年史。鯉淵学園, 茨城県東茨城郡内原町。
- 37) 鯉淵学園同窓会・寮史編集委員会 (1991), 鯉淵学園学生寮史。鯉淵学園同窓会, 茨城県東茨城郡内原町。
- 38) 五十年史編集委員会 (1996), 鯉淵学園五十年史。五十年史記念事業実行委員会, 茨城県東茨城郡内原町。